

編集後記

今月の特集は老人痴呆とリハビリテーションである。高齢化社会が進行中の今日のわが国において、老人痴呆は極めて大きな社会的関心事となっているが、リハビリテーションの領域においても大きな問題としてクローズアップされてきている。

本特集では先ず、老人痴呆（老年期痴呆）の定義、診断、病理に関する最近の知見について、阿部・東儀氏がわかり易く解説をされている。老年痴呆に関する最近の病態生理学的知見の進歩については注目すべきものがあるが、一方、臨床に携わる者にとっては、著者らが指摘されたように、痴呆症例の20～30%を占める回復可能な痴呆の鑑別に細心の注意を払わなければならない。次に米本氏らは、超音波による総頸動脈血流量の測定値と老人痴呆に関する長谷川スケールの値との相関関係について検索して有意の知見を得たことを述べられたが、この超音波総頸動脈血流量測定は比較的簡単にできる検査法なので、もし再現性が高ければ高いものであるならば、痴呆以外にもリハビリテーション上で応用の範囲が広いものと思われる。次に三島氏は脳卒中のリハビリテーションと老人痴呆について、水島・岩倉氏は大腿骨頸部骨折のリハと老人痴呆について、また、矢内氏は痴呆老

人のデイケアについて、それぞれ、豊富なご経験に裏打ちされた数々の知見を述べられている。ことにデイケアに関しては将来の実施を考えておられる方が多いと思われるので参考になることが多いであろう。

巻頭言で新谷氏は心疾患のリハビリテーションと題して、わが国におけるその歩みを振り返っておられるが、25年間の御苦労の様が偲ばれるとともに、氏の説かれるように、今後心疾患のリハセンターが建設されることを大いに期待したい。研究と報告は川平氏らと窪田氏らの2篇であり、症例報告は岡島氏らの1篇であるが、いずれも特色があり、興味ある論文である。

現在、投稿論文は読者諸兄のご協力により、かなりの数が集っており、投稿から掲載まで1年近くかかるような状況で、投稿された諸兄にご迷惑をかけているが、今後、紙面の許す限り掲載論文数を増やして待機期間の短縮をはかりたいと考えている。なお、学会誌と本誌の待機論文の状況は必ずしも同じではないので、一刻も早い掲載を希望される方は、学会誌と本誌の待機論文の状況を事前にチェックされて、早く掲載できる方を選ばれることをお勧めする次第である。

（横山 巖）

編集顧問

天 児 民 和
大 島 良 雄
河 邨 文 一 郎
五 味 重 春
砂 原 茂 一
津 山 直 一
土 屋 弘 吉

編集委員

明 石 謙
上 田 敏
緒 方 甫
大 井 淑 雄
大 川 嗣 雄
千 野 直 一
横 山 巖

編集同人

赤 津 隆
今 田 拓
今 村 哲 夫
岩 倉 博 光
江 口 壽 榮 夫
小 川 孟
荻 島 秀 男
奥 川 幸 子
加 倉 井 周 一
小 島 蓉 子
齊 藤 正 也
笹 沼 澄 子
澤 村 誠 志
高 橋 勇
高 松 鶴 吉
武 智 秀 夫
土 屋 和 夫
土 肥 豊
永 井 昌 夫
中 村 隆 一
野 島 元 雄
野 村 欽
長 谷 川 恒 雄
初 山 泰 弘
福 井 圀 彦
松 村 秩
三 島 博 信
矢 谷 令 子
米 本 恭 三
渡 辺 英 夫
（五十音順）

（細田，山田）

次号予告（第13巻 第5号）

特集 施設の再検討

肢体不自由児施設の今後の方向……………宮城県・拓桃園 高 橋 孝 文
身体障害者更生援護施設……………宮城県・拓杏園 今 田 拓
身体障害者更生相談所について
—その役割と展望……………兵庫リハセンター 澤 村 誠 志・他
リハビリテーションにおける保健所の

役割……………横浜市・民生局 伊 藤 利 之
特別養護老人ホームの今後のありかた……………七沢病院 横 山 巖

巻 頭 言 ダウイニズムとリハビリテーション……………独協医大 高 橋 勇

展 望 障害者水泳プールの一考察……………愛知県障害者コロニー 矢部京之助・他

研究と報告 等運動性理論による等速度他動運動時の
運動覚に関する検討……………群大・草津分院 丸 田 和 夫・他

短 報 在宅ねたきり老人の死亡調査……………丘珠病院 岡 本 五十雄

講 座 リハ医に必要な全身管理
(5) 慢性閉塞性肺疾患……………国療東京病院 山 口 明
機能修復 (1)：脳卒中の機能回復……………七沢病院 福 井 圀 彦

一 頁 講 座 義肢のパーツ
5：股義足の components……………国立リハセンター 初 山 泰 弘